

千秀だより

横浜市立千秀小学校

10月号

平成25年(2013). 10. 1



灯火親しむ秋、読書への誘い

校長 市川幸男

校庭の、桜や梅の木の葉が次第に色づき始め、朝夕の冷え込みに、秋の訪れを感じる季節となりました。今月の11日には前期末を迎えます。4月に始まった平成25年度ですが、早、折り返し点となりました。時の過ぎることの早さにあらためて驚かされます。これまで本校の教育へのご理解とご支援を賜りました保護者や地域の皆様へ、紙面上ではありますが、あらためて御礼申し上げます。3日間の休みの後、すぐに後期が始まりますが、子どもも学校職員も、しっかりと前期を振り返って、新たな学期を迎えていきたいと思えます。変わらぬご支援ご協力お願い申し上げます。

さて、秋といえば、芸術の秋、スポーツの秋。はたまた食欲の秋といろいろな冠がついた言葉があります。その中に「読書の秋」もあります。落ち着いた秋の季節、じっくりと本の世界に触れることは、心が落ち着き、とても良いことだと思います。読書といえば、現代人の活字離れが叫ばれて久しいですが、本校児童にもその傾向が色濃く出ていることが、先の全国学力学習状況調査で明らかになりました。その調査は6年児童が質問に答えるという形で行われたのですが、「読書は好きですか?」「週1回、学校の図書室や町の図書館に行きますか?」の質問に「はい」と答えた割合が全国平均を大きく下回るという残念な結果でした。確かに生活の範囲に公立図書館は無く、恵まれた環境とはいえませんがそれでも私としては、本を読むことを好きでいてほしかったのです。

調べてみると、本を読むという活動は脳全体を使うとても良いトレーニングであるということが、脳科学者によって明らかにされています。例えば文字を読むという活動は主に人間の脳の左側(言語脳・論理脳)を使っていると考えられ、文章を読むことで頭の中に何らかのイメージを思い浮かべている時は、右側の脳、右脳を使っているというのです。更に読書の最中にさまざまなアイデアが浮かぶことがよくありますが、これは創造を司る前頭葉という部分を使っていることの現れなのだそうです。つまり読書は人間の脳の大部分を総動員して行われる最高の脳トレだということで、「読書をする賢くなる。」という言葉は脳科学の観点からもはっきりとした事柄のようです。脳科学の世界は私には専門外ですが、長年教師として子供たちと一緒に生活してきて、実感として感じるがあります。それは読書好きな子には優しい子が多いということです。人の心の優しさとは、他者の痛みに対する想像や共感を土台にしているものです。読書は一つの疑似体験の場です。直接行くことのできない世界や、会うことはできない過去の偉人や未来の人々とも接することができるのです。本を読むことを通して、社会を広げ、自分とは年齢も、性別も、そして住む世界も異なる人と気持ちを共有する体験をしている子供たちには、やはり優しい心が育っていくのでしょうか。頭も、そして心も豊かに育ててくれる読書。これまでも優しい心の持ち主の千秀の子供たちが、一層、豊かな心を持った子に育つように、豊かな読書経験を応援して参りたいと存じます。

秋の夜長、テレビを消して、親子で読書タイムというのはいかがでしょうか。